

Chiroptera

コウモリ通信

Vol.8 No.2 2000.12
(通巻第13号)



CONTENTS	コウモリフェスタ
	コウモリフェスタ 2000 in 広島 編集部 1
	各地から
	ヒナコウモリM 13705 の秋田市における回収報告 向山 満 3
	北海道苫前郡で保護されたヒナコウモリ 佐藤美穂子・小野 宏治 4
	神奈川県西丹沢で越冬したヒナコウモリ 山口 喜盛 4
	群馬県でのコウモリ観察記録 清水 孝頼 7
	神奈川県山北町で保護されたアブラコウモリの飼育知見 山口 喜盛 8
	海外レポート
	アメリカンサモアのオオコウモリ 大沢 夕志・大沢 啓子 10
	事務局から
	コウモリの会総会報告 編集部 12
	インフォメーション



コウモリフェスタ 2000 in 広島

編集部

2000年7月8、9日、広島県広島市の安佐動物公園にて、コウモリフェスタ 2000 in 広島が開催されました。

今回、広島でコウモリフェスタを行うきっかけとなったのは、広島市内で、全国でも非常にめずらしいオヒキコウモリ(注1)のコロニーが見つかったことです(発見の経緯などは、前号のコウモリ通信 p 14 金井塚務氏の記事をご覧ください)。地元で展開されている保護活動を応援する意味もこめて、コウモリの会と、地元の安佐動物公園、西中国山地自然史ネットワーク、宮島自然史研究会の方々とともにコウモリフェスタを行い、広島のみなさんにコウモリの自然界での役割やオヒ



写真1 展示、講演会の会場になった安佐動物公園科学館



写真2 コウモリフェスタ

キコウモリの生態についてアピールしようということで、準備をすすめました。

土曜日の講演会には約 100 人の方が訪れ、熱心に講演に聞き入っていました。

日曜日には、多くの子ども連れのお客さんがコウモリ紙芝居を楽しみ、また、コウモリにねぐらを提供する巣箱作りも行われました。市民の方々に少しでも、コウモリについての興味、理解を広めることができたと思っています。

オヒキコウモリの保護活動について、コウモリの会では以下の文書を公開しました。

「コウモリフェスタ 2000 年宣言」

数年前までは日本には生息しないのではないかとされていたのがオヒキコウモリです。1996 年に初めて九州の無人島で最大 33 頭程が生息しているのが確認されました。さらに今回は 400 頭以上という日本最大規模でかつ繁殖と冬眠を行っていると言う、貴重な場所がここ広島で発見され調査保護活動が行われています。

校舎建物の老朽化による建替と言うやむをえない事情に際し、地元の研究者の方々の働きにより、立替を行う広島修道学園のご協力を得ての保護活動が進められています。

学校法人修道学園関係者におかれましては、一般にあまり関心をもたれないコウモリの保護活動について、生徒の研究の場にされるという積極的な対応に敬意を表するとともに、理解を示されての対応に感謝を申し上げたいと思います。

今後は関係者の方々が現在取り組まれております活動がうまく軌道に乗り、オヒキコウモリが安心してここ広島で今後も生息し続けることができるよう皆様方のご理解をお願い致します。

2000 年 7 月 9 日

コウモリの会 会長 山本輝正

今後とも、オヒキコウモリの保護、調査活動についてコウモリの会でもできる範囲での協力をしていきたいと考えています。

(注1) オヒキコウモリ *Tadarida insignis* 尾が膜の先から著しく突き出ているのが特徴のコウモリ。大きさは、日本に生息するコウモリの内では中くらい。耳が大きく、口元にしわがある。目も比較的大きい。



オヒキコウモリ (画: 畑瀬 淳)

■ 2001 年コウモリフェスティバルは岐阜で！

来年 2001 年のコウモリフェスティバルは今までとは少し違った形での開催を目指して現在進めています。これまでのコウモリフェスティバルは、コウモリの研究を各地でやっていらっしゃる方々の調査や保護活動の手助けとなる様に、それぞれの地域でのコウモリへの理解者や活動への協力者を広げることが主目的として、開催されてきました。

このような形での開催も確かに重要ですが、広い意味でのコウモリの保護や理解者を増やすためには、別のアプローチも必要かと考えています。

そこで今回は、観光化された鍾乳洞の、より生き物にやさしい形のものへの変革(環境教育のある意味での拠点化)を目的とした開催を計画しています。

現在までに日本各地で鍾乳洞の観光地化に伴う内部の破壊が行われてきました。従って、このような試みは遅きに失したとの批判もあるかもしれませんが、今からでも観光地化した鍾乳洞で減ってしまった(いなくなってしまった)生物が、全てではないにしろ、また戻って来てくれるような状態に必ず出来るものと考えています。そのような試みは、けつしてたやすい事とは思いませんが、努力する価値は十分あると考えてます。

このような鍾乳洞の環境教育への利用と生物回復の考えに理解を示し、そのような模索と実践をすることにご尽力をいただけることになりました「サンパークランド美山鍾乳洞」さん(岐阜県郡上郡八幡町美山 421)を会場と

して、2001 年のコウモリフェスティバルを開催したいと考えています。

この催しにすでに協力を表明されているのが地元の第 3 セクターの(財)郡上八幡産業振興公社(岐阜県郡上郡八幡町島谷 520-1)です。また地元の環境教育関係の NPO の方々に協力も頂けるとの話も出ています。

日程としては、地元の祭り(郡上踊り)の関係で、8 月 25・26 日(土・日)でどうかと検討中です。

具体的な内容等については現在検討中ですが、コウモリの会の評議員で東洋蝙蝠研究所理事長の赤澤泰氏が、昨年チェコスロバキアでの鍾乳洞とその観光化について視察をしていらっしゃいました。そこで今回は氏に、「観光洞窟の先進国チェコスロバキアの現状報告について」と「観光鍾乳洞の問題点と将来の可能性について」と題してお話をして頂き、皆さんと共に観光化された鍾乳洞の観光教育への場としてのあり方などについて一緒に考えていけたらと考えています。

以上が今年のコウモリフェスティバルについての現時点でのご案内ですが、ご意見等がございましたら事務局までご連絡下さい。

なお広い意味でのコウモリの保護や理解者を増やすためには、今回のような持ち方以外に都会で開催する方法もあるとの意見も頂いております。今後数年のうちにはそのような場所で開催できるようにとも考えています。

この点につきましても皆様のご意見をお待ちしております。



ヒナコウモリ M 13705 の秋田市における回収報告

向山 満

過日、コウモリの会事務局を通して秋田市で保護された標識コウモリ M13705 について照会があった。当初はアブラコウモリということで放獣の方法などについて事務局に問い合わせがあったとのことである。標識番号からヒナコウモリであると確信し、発信先に問い合わせをしたところ、番号の読み違いであって私が標識したヒナコウモリであることが判明した（写真1）。以下にその状況を報告する。

2000年3月19日、秋田市下浜の民家で弱った標識コウモリが保護されて同市大森山動物園に持ち込まれた。同園の獣医師を中心とした措置で回復の兆しがみられたが翌3月20日に死亡した。

3月23日、向山が同園に出向き、該当個体を確認、受領して持ち帰る。仮剥製にして現在のところ三戸高校生物教室で保管している。

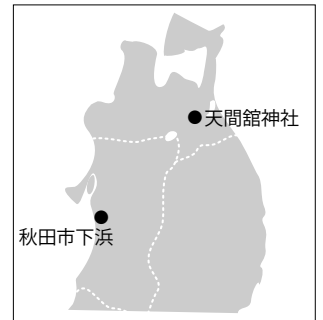
ヒナコウモリ M13705 は、1998年8月3日に青森県天間林村天間館神社コウモリ小舎（青森でのコウモリフェスティバルで観察会をした場所）で標識した雄幼獣で、2冬を経過して死んだことになる。これまでに秋田県におけるコウモリ調査が不十分であったこともあり、今回の標識コウモリの確認はヒナコウモリの秋田県初確認となった。

ところが、それ以上に興味深い知見を教えてくれる結果となっている。これまでに青森県で標識したヒナコウモリの県外回収は岩手県と宮城県からだけであって、日本海側からは無かった。こうしたことから青森県で繁殖期を過ごしたヒナコウモリは太平洋側の雪の少ない地方（遠方は関東地方まで南下して）で雌雄混合の少数の群に分散して越冬し、春には青森県に戻ってくるという季節移動を推測していた。しかし、今回の回収例は日本海側における越冬をも推測させる知見となった。他にも、青森県の東部と西部の個体群は基本的には交流がないと考えていたが見方を変えなければならなくなったとか、数少ない雄の生態に関する知見であるとか、いろいろと興味深い知見を提供してくれる結果となった。

私は現在秋田県版 RDB 作成に携わっていて、すでに、検討資料の原稿を終了していたが、責任者と打ち合わせて、ヒナコウモリを秋田県産哺乳類として認定し、評価の対象とすることになった。その結果は近いうちに他のコウモリ類と一緒に公表される予定である。計測値などくわしいデータは別の形での報告を考えている。

ヒナコウモリの標識はこれまでに青森県を中心に岩手県、滋賀県、福井県などで標識していて、標識地以外での回収は前記の他に京都市などの例がある。一般からの今回のような問い合わせの集約先として本会の役割がいかに大きいものであるかと再確認させられました。今回の問い合わせ情報について便宜を図っていただいた事務局に感謝すると同時に、今後とも事務局の奮闘に期待し、また、会員のみなさんにおかれては標識コウモリに注意を払っていただくことをお願いします。

（むこうやま・みつる 青森県三戸高等学校）



秋田市下浜は日本海に面しており、天間館神社とは直線距離で約 160 km 離れている

秋田市で回収されたヒナコウモリ雄 M 13705。2000.03.23 撮影



北海道苫前郡で保護されたヒナコウモリ

佐藤美穂子・小野 宏治

収容日：2000年10月1日午前7時30分 現地住所：北海道苫前郡小平町字大楸
現地保護者：工藤雄壽さん



写真1 保護されたヒナコウモリ



写真2 ヒナコウモリ背面



写真3 ヒナコウモリ腹面と翼

収容状況

北海道苫前郡小平大楸の内陸8kmほどのところで、ダム建設により水没予定の道路の、代替え道路建設工事を行っている。現在コンクリート壁を作り、そのコンクリートの養生のためにシートを被せている。シートは風などによりずれるので時折なおす。1日朝もその作業を行っていたところ、午前7時位にシートが重なっている部分の、シートとシートの上に、コウモリ1個体が貼り付いているのを発見、軍手で捕まえた。始めは蓋のない入れ物に入れ、車内に収容していたが、しばらくして見に行くと逃げて車内の天井に貼り付いていた。事務所内では、土嚢用の袋に入れていたが、これからも逃げて、ドアの上部に付いているストッパーの間に貼り付いていた。プラスチックケースに入れて海鳥センターへ持ち込んだ。

午後14:30 北海道海鳥センターに持ち込み、同定を依頼。センターで体重や外部計測を行い、前田(1994)によりヒナコウモリ *Vespertilio superans* と判断した(写真1-3)。その後、保護者が収容地で放獣するというので再び持ち帰った。

計測値

ヒナコウモリ *Vespertilio superans* ♂ ●体重 44.6g
●頭胴長 80mm ●前腕長 48.8mm ●尾長 29mm
●左翼開長 140mm

備考

体毛は黒色で白灰色の毛がたくさん混じっていた(写真2参照)。体重は前田(1994)の記載よりも重かった。後肢の飛膜の出ている位置は、尾側と腹側でほぼ同じだった。尾先は飛膜より4mmほど出ていた。

引用文献

前田喜四雄. 1994. コウモリ目. 阿部永ほか, 日本の哺乳類. pp37-70. 東海大学出版会, 東京.

(さとう・みほこ, おの・こうじ 北海道海鳥センター)

神奈川県西丹沢で越冬したヒナコウモリ

山口 喜盛



写真1 丹沢湖ビジターセンター(中央)と周囲の環境

昨年の晩秋から今年の春にかけて、私の職場である丹沢湖ビジターセンター(以下、ビジターセンター)において、ヒナコウモリ *Vespertilio superans* の越冬集団を確認したので報告します。

確認の経緯

1999年11月26日15:00頃、ビジターセンターの瓦屋根(写真2)からチ、チッという声を聞きました。虫のような鳥(ホオジロ類)のような声でしたが、屋根から聞こえてきたのでコウモリではないか!?と期待して出てくるのを待ったところ、12月4日の17:00頃、コウモリが瓦の下から飛び出すのを確

認することができました。その時バットディテクター MINI-3 (以下、BD) で声を聞いたところ、周波数は 20kHz 前後で、ゆっくり「ピッ、タン、タン」と聞こえました。その後、霞網で捕獲してヒナコウモリを確認しました (写真 3,4)。

ビジターセンターは平成 8 年に新築された二階建てのコンクリート造りで、ダム湖である丹沢湖の畔に立っています。周辺はスギやヒノキの植林地や若い落葉広葉樹林に囲まれており、車の交通量が少なく、まさに静かな湖畔です (写真 1)。

出巢の観察

1 月は暖かい日に数頭の出巢を確認しましたが、3 月の末になると瓦の中から声がよく聞かれるようになり活動が活発になりました。4 月の観察 (表 1) では、最大 35 頭の出巢を確認しましたが、気温の低い日や小雨 (ほとんど濡れない程度) の時は、出巢個体数が極端に少なくなるか出てこない傾向がありました。出巢はまだ明るいうちから始まり、5 頭前後から多いときで 10 頭くらいが、ほぼ一斉かあるいは連続して出ることが多く、ほとんどが湖に向かって飛んでいきました。そして、4 月の末には 20 頭以下に減少し、5 月の始めにはすべていなくなりました。

その後、8 月の初めにビジターセンター周辺や上流域で数頭が飛び回るのを確認しましたが、屋根に初めて入ったのは 11 月 9 日でした。そして、11 月末には夕方屋根から声が聞こえるようになり、数頭が入っているようでした。

1 月末に、コウモリが出入りする瓦の下にセンサーを差し込んで瓦の中とその外の一週 (24h) の温・湿度を測ったところ、瓦の中は最高が 23℃、最低が 0℃で、外部 (日の当たらないひさしの下) は、最高 12℃、最低 1℃でした。湿度は、どちらも 47 ~ 83% でした。屋根は直射日光が当たるので、当然冬でも中の温度は高くなっており、夜中の冷え込みとの温度差は 23℃もありました。声の聞こえてくる感じから瓦の奥の方に入っているとは思えないので、このような環境で寝ているものと思われます。

採餌の観察

- 1999 年 12 月 5 日 (17:10) 湖畔の林縁で低空でガを追いかける (バズ音を盛んに出していた)。
- 2000 年 4 月 4 日 (17:40) まだ明るいにも関わらず、1 頭のヒナコウモリが上空 50m 位の高さで乱舞するイワツバメの群の中に混じって飛んでいた。イワツバメに時々追いかけるが、逃げるように移動しながら採餌行動をしていた。
- 2000 年 4 月 23 日 (18:50 頃) 道路沿いの桜並木で、5 ~ 6 頭のヒナコウモリが路上 5m 位の高さで、幅 20 ~ 30m 間を行ったり来たりして採餌していた。

捕獲個体のデータ (表 2、写真 3, 4)

2000 年 3 月 20 日 (晴) 18:10 頃、屋根に霞網を掛けて 3 頭を捕獲しました (環境庁第 5-2 号)。

声の記録

2000 年 11 月 27 日 (晴)、二階のテラスに BD とマイク (可聴音) を設置して、屋根内にいるヒナコウモリの声と同時に録音をしたところ、表 3 のように聞こえました。



写真 2 ヒナコウモリが利用した瓦。←のように飛びだす

表 1 ヒナコウモリの出巢状況

観察日	天気	気温 (°C)	初出巢時間	出巢総個体数 (頭)	観察時間
4/4	曇	11.7	17:40	18 +	17:30 ~ 19:05
4/6	曇	12.0	17:55	30 +	17:45 ~ 19:05
4/7	晴	13.7	18:08	35 +	17:40 ~ 19:15
4/8	晴	15.3	17:55	29 +	17:40 ~ 19:10
4/11	晴	11.2	18:25	9	17:40 ~ 19:00
4/12	晴	14.5	18:12	25	17:40 ~ 19:00
4/14	晴	19.6	18:10	26	17:30 ~ 19:00
4/15	曇 (小雨)	8.8	18:28	1	17:30 ~ 19:00
4/19	晴 / 曇	15.5	18:14	29	17:30 ~ 19:00
4/22	晴 / 曇	16.7	18:20	25	18:00 ~ 19:00
4/23	晴	17.0	18:34	30 +	18:00 ~ 18:50
4/24	晴	10.2	—	0	18:00 ~ 19:00
4/25	晴	14.0	18:30	19	18:00 ~ 19:10
4/27	晴	16.7	18:14	16	18:00 ~ 19:10
4/28	晴	16.7	18:35	16	18:00 ~ 19:10
4/30	曇	14.7	18:29	11	18:00 ~ 19:10
5/3	晴	18.7	—	0	18:00 ~ 19:15

* 4/24 は夕方雷雨の後晴れたが寒かった。気温は県三保ダム管理事務所 18:00 観測値。
+ : 観察終了後もねぐら内 (屋根) で声が聞こえた。

表 2 捕獲個体のデータ

	性 (陰莖長)	体重 (g)	前腕長 (mm)
①	♂ (6 mm)	13.1	48.0
②	♂ (7 mm)	12.3	44.3
③	♂ (7 mm)	12.1	49.0



写真 3 捕獲したヒナコウモリ



群馬県でのコウモリ観察記録

清水 孝頼

はじめに

私は今年からコウモリの会に入会しました。群馬県立自然史博物館で解説ボランティアをしており、日本野鳥の会・群馬支部会員でもあります。また、関東森林管理局森林ボランティアリーダー講座を受講し、10月に修了いたしました。そして、群馬県立妙義少年自然の家で自然の中での感動体験事業野外活動指導者講習も受講中でこちらも来年2月には修了する予定です。コウモリについてこれから少しずつ勉強し、私の活動する場面の中で、身近でありながら、あまり知られていないこの動物について紹介してゆこうと思っています。

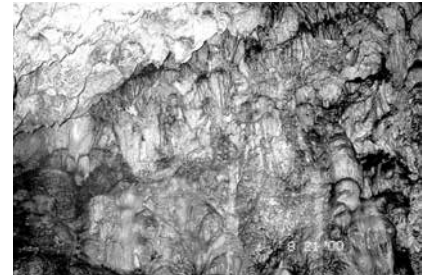


写真1 不二洞内部。ススで黒くなっている

今回、群馬県内の2カ所の洞くつのコウモリ生息状況を調べましたので、ご報告いたします。この調査は、上野村振興公社に入洞、写真撮影の許可をいただき、写真撮影は必要最小限にとどめ、ディスターブに注意して行いました。なお、この調査結果は群馬県立自然史博物館へも報告する予定です。

群馬県多野郡上野村不二洞（群馬県指定天然記念物）

2000年8月21日、群馬県多野郡上野村不二洞（ふじどう）に行ってきました。ここは標高780mにある鍾乳洞で、このような高地にあるものは珍しく、観光地として一般に開放されています。奥行き総延長2200m、最大内径30mです。作られたのはだいたい170万年くらい前からで、現在ではその成長はほとんど止まっています。かつてはコウモリの生息も多く見られたようで、入口を入ってまもなくたくさんのグアノが見られます。鍾乳洞内部は発見直後の入洞者によるたいまつのススによって黒くなっているところがあります（写真1）。この日は2時間くらい観察をしましたが、見られたコウモリはキクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* が1頭でした（写真2）。



写真2 キクガシラコウモリ

出口付近に空穴と呼ばれる垂直の穴があります。ここは地上の小さな穴に通じており、コウモリはここから出入りしているようです。人間が数多く入ってくるなかで、しかも洞内は強い照明がついているのに、コウモリにめぐり会えるとは驚きでした。上野村にはもう一つの鍾乳洞、国指定の天然記念物になっている生犬穴（おいぬあな）があります。入口は閉鎖され一般者が入ることはできないため、多くのコウモリの生息が確認されています。

群馬県吾妻郡中之条町の自然洞窟

翌日の8月22日には群馬県吾妻郡中之条町にある自然洞窟に行ってきました。ここは道路から30分くらい遊歩道を登ったところにあります。途中、カモシカにも会いました。この洞窟は今から1000万年くらいにできたもので、幅が10m、奥行き60m、高さが2～5mのL字型をしています。かつてこの洞窟の高さを沢が流れていたときに、河床面の低下にともない流紋岩体内の脆弱な部分が地下水によって侵食されてきたものと考えられています。今の沢は落差30mの仙人の滝を下って流れ落ちています。



写真3 ウサギコウモリ

この洞窟では、ウサギコウモリ *Plecotus auritus* を1頭、確認することができました（写真3）。洞窟内部は流紋岩の角礫が散在していて、足元がとても不安定でした。最初、羽音はするものの、どこにいるのかわかりませんでした。探しながら少しずつ奥へとすすみながら、ふと上を見るとぶら下がっているではありませんか。すぐに奥の方へと飛んでいってしまい、もう見つかりませんでした。

参考文献

- 群馬県高等学校教育研究会・群馬県立自然史博物館編.1999.群馬県天然記念物（地質・鉱物）緊急調査報告書.群馬県教育委員会.上野村史-上野村の自然（地形・地質・気象）.1997.上野村.
- 夏目道生.1999.上野村史-上野村の自然（動物）.上野村.
- 高橋武夫.1989.日本の自然景観北関東版.環境庁.

（しみず・たかより 群馬県高崎市）

神奈川県山北町で保護されたアブラコウモリの飼育知見

山口 喜盛



写真1 保護した雌が産んだ幼獣雄2頭。47日齢、放野する直前

1998年6月15日、山北町の工場倉庫内で、駆除行為によるアブラコウモリ4頭が保護され、筆者の勤務する県立丹沢湖ビジターセンター（以下、ビジターセンター）に届けられた。筆者はこのアブラコウモリをしばらく飼育し、出産も確認したので、ここに観察内容を報告する。

なお、アブラコウモリの飼育や死亡した個体の解体についてお世話になった、渡辺憲子氏と長縄今日子氏に深謝する。

保護された時の状況

届けられたアブラコウモリ4頭のうち、1頭はすでに死んでおり、しばらくしてから別の1頭も死んだ。残りの2頭は、体が冷たく死んだようにぐったりとしていたので、とりあえずチリ紙に水を染み込ませて口元においたところ、喉が乾いていたらしく舌を出してよくなめた。その後ミルワーム（チャイロコメノゴミムシダマシの幼虫）を与えたところ、1頭は口元にちらつかせると自分から口を開けて食べたが、別の1頭は食べようとはしなかった。

アブラコウモリは夜行性なので、ビジターセンターでは面倒が見られず、その日の夜から筆者の自宅で飼育することにした。飼育ケースは、市販されているプラスチック製の小動物用飼育ケース（幅39cm・奥行き33cm・高さ23cm）で、中にはぶら下がりやすいように発泡スチロールの板を斜めに立て掛けておいた。

出産の確認

餌を食べなかった方の個体は、16日の昼間2頭の新産児を産んだ。しかし、筆者が確認した時にはすでに死んでおり、母獣は死んでいる新産児を腹の下に包み込み盛んになめていた。この新産児を産んだ個体はその後もなかなか餌を食べないので、2日後に県立自然保護センターに預けたが翌々日死亡した。預けた時の体重は7gであった。

生き残った個体は1頭になり、体力の回復がみられなかったのでしばらく飼育していたところ、26日の午前0時頃、発泡スチロールの板にしがみついている両脇の皮膚の下で2頭の新産児を確認した。出産した時間はわからなかった。

母子の飼育内容

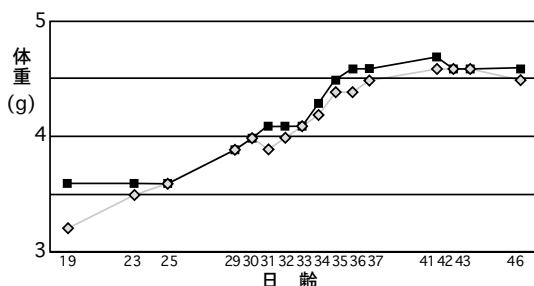
母獣には、ミルワームをピンセットで与え、水はスポイトまたはシリンジ（編集部注；注射器の針のついていないもの）で与えた。母獣に与えたミルワームの量は、一晩に30～50匹くらいで、午後7時頃、午前0時頃、午前7時頃の三回に分けて与えた。ミルワームの重さはそのつど計っていないが、一日量は1.5～3g（平均40匹、約2.5g）くらいであった。7月19日に、母獣の体重を測定したところ7.3g（食前）だったので、この頃は、1日に体重の約34%くらいのミルワームを食べていたことが推察される。

母子は非常に臆病で、幼獣は母獣の体の下に潜り込み、母獣はすぐに狭い所や隙間に入り込んでしまうため、無理に母子を離すことはしなかった。したがって体重の測定は幼獣がある程度成長し母獣と離しやすくなった19日齢（7月15日）から始めた（図1）。

アブラコウモリの幼獣の成長は早く、生後約30日で成獣（体重5～10g）とほぼ同じ大きさになり飛翔するようになる（前田，1994）と言われている。25日齢の時点で、

片方の幼獣は成長が進まず、片方も遅れていたため、母獣の栄養不足を補うために、7月23日（幼獣は27日齢）からミルワームをペースト状に溶かした子犬用粉ミルクに浸してから母獣に与え始めたところ、幼獣の体重は増加した。さらに、7月29日（幼獣は33日齢）からは、子犬用粉ミルクに乳児用ポポンS（水50mlに一滴の割合）を混ぜたところ、幼獣の体重は再び増加した。35日齢くらいから幼獣は母獣の体にしがみついていることが少なくなり、幼獣に母乳が与えられているのか不安になったので、37日齢（8月2日）から、

図1 アブラコウモリ幼獣2頭の体重変化



幼獣に直接子犬用粉ミルクとカルシウム粉を水で溶かしてシリンジで与え始め、44日齢（8月9日）からは、さらにミルワームの中身を混ぜたが、46日齢まで体重にほとんど変化はみられなかった。

母獣の食欲は8月7日（幼獣は42日齢）頃から落ち、一晩でミルワーム20匹前後（1.2gくらい）に減ったので、同時に幼獣に与えている水で溶かした子犬用粉ミルク（9日からはミルワームの中身を混入）をシリンジで与えた。

放野

放野後のアブラコウモリがねぐらとして使えるように、巣箱の中にアブラコウモリを入れたまま屋外に放置することにした。そのため、巣箱に馴染むように40日齢から飼育ケースの中にコウモリ用巣箱を入れて、その中で飼い始めた。

放野は、保護（駆除）された近くに放しても再び同じことになる可能性があるため、約8km離れた秦野市の山麓にある川の近くの住宅地で行うことにした。

8月12日（幼獣は47日齢）の夕方、母子の入ったコウモリ用巣箱を一階建て木造家屋の戸袋の上に設置したところ、午前0時頃、母獣は巣箱から飛び出し、幼獣もいつのまにかいなくなっていた。その後、母獣と幼獣はこの巣箱に戻ることはなく、消息はわからなかった。

保護したアブラコウモリの産子数と性比

今回保護した成獣4個体は、雌が3頭で、雄が1頭であった。3頭の雌はいずれも妊娠しており、一腹の産子数は、2頭が2子、1頭が4子（胎児）であった。

まとめ

母獣に子犬用粉ミルクやビタミン剤を与えたところ幼獣の体重が増加したことから、幼獣の成長が停滞したり遅れてしまったのは、ミルワームだけを与えていたことによる母獣の栄養不足が原因と考えられる。

また幼獣は、37日齢以降ほぼ成長が止まり、46日齢になっても成獣の体重（5～10g）に達しなかったのは、成長の遅れにより成長期が過ぎてしまったことが考えられる。

幼獣は、42日齢の測定値を見てもわかるように、成獣に比べるとやや小型であったが（表1、2）、39日齢に室内で飛翔するのを確認した。今回、母獣にミルワームだけを与え続け、途中から子犬用粉ミルクなどを加えなければ、幼獣は矮小化し、飛翔することができなかったかも知れない。今後このような母子を保護した場合は、母獣に与える栄養のバランスについて十分に考慮する必要がある。

アブラコウモリは建物の隙間に入り込むので、糞尿などによる衛生上の問題がしばしば起きており、筆者は山北町で、コウモリが部屋のなかに入ったり、糞が溜って困るという相談を受けたことがある。コウモリは許可なく捕獲や殺傷したりすることができないので、どうしても困った場合は追い払うしかないが、できればコウモリ用巣箱を設置し、別の場所に誘致するなどの方策を検討するようにしたい。アブラコウモリは、棲み家に関しては人に依存しているが、衛生害虫や田畑の害虫を駆除し我々人間生活に重要な役割を果たしていることはよく知られていない。今後、アブラコウモリと人とがうまく共存していけるように、糞害等の対処の仕方や公益性について広く啓蒙していく必要がある。

引用文献

前田喜四雄. 1994. コウモリ目. 阿部永ほか, 日本の哺乳類. p55. 東海大学出版会, 東京.

内田照章. 1985. こうもりの不思議. 球磨村森林組合, 熊本, 146pp.

(やまぐち・よしもり 神奈川県立丹沢湖ビジターセンター)

表1 アブラコウモリ母子の測定値. 子は42日齢

	前腕長	全長	尾長	頭胴長	体重
母	35mm	84mm	36mm	48mm	
幼(♂)	31mm	75mm	32mm	43mm	4.6g
幼(♀)	31mm	72mm	30mm	42mm	4.6g

表2 死亡したアブラコウモリ成獣2頭の測定値（冷凍後）

	前腕長	全長	尾長	頭胴長	体重
♀	36mm	90mm	39mm	51mm	10.0g(胎児4頭含)
♂	34mm	81mm	37mm	44mm	4.0g

*この報告は、山口喜盛「山北町で保護されたアブラコウモリの飼育知見」神奈川県立自然保護センター報告第16号（平成11年3月）pp43-48を、著者の了承のもと、写真等を一部省略し、転載したものです。

アメリカンサモアのオオコウモリ

大沢 啓子・大沢 夕志

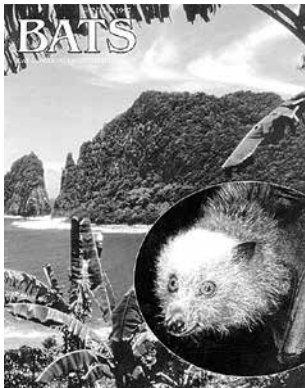


写真1 BCIの会報1997.冬号。表紙もアメリカンサモアの景色とサモアオオコウモリ

オオコウモリがすむアメリカの島

アメリカンサモアに興味をもったのは、Bat Conservation International (BCI) の会報1997年冬号(写真1)の記事にひかれたからである。アメリカ合衆国の領土の中で唯一南半球にあり、グアムを除けば合衆国でオオコウモリの生息するただ一つの場所である。記事によれば、ここに国立公園ができたのは、オオコウモリの生息地保護のためというのが、かなり大きな理由を占めていて、国立公園になるにあたってBCIもかなり強気に推進したようだ。これはぜひ行かねばと思い、1999年の夏に訪問した。

リゾート観光は今は昔・・・

アメリカンサモアへは、日本からは、ハワイのホノルル経由で行くか、南太平洋の島々を2つ以上経由しなければならない。時間的にはホノルル経由が速いのだが、週2往復しかなく行きにくい。また、ひと昔前までは観光に力を入れていたので、それなりの施設はあるのだが、それも現在は面影だけで、観光客を受け入れる体制が整っているとは言い難い。したがって、日本人観光客はまず来ない。

われわれが泊まったレインメーカーホテルは唯一の「大型リゾートホテル」のはずなのだが、プールの水は緑色に濁り、乾期のいちばんいい季節なのにお客はほんの数組だけ。ガイドブックに出ているレストランの一つは、メニューにはたくさんの料理が書いてあるのだが、どれを注文しても「できない」との返事が返って来る。どうやら開店休業に近い状態らしく客席にいるのは知り合いで、空いている席には猫も座っていた。

しかしリゾート観光に興味のない人にとっては魅力的な南の島で、クッキングバナナやタロイモの食べられる地元の人向けの食堂や売店は健在だし、大きなツナ缶工場はお隣のサモアからも出稼ぎに来るようで、たくさんの人が出入りしていて活気がある。韓国出身の人が経営する「SUSHI屋」では、新鮮なマグロの寿司を食べることもできる。

アメリカの国立公園なので、まずはビジターセンターへ情報収集に行った。一般的にアメリカの国立公園のビジターセンターというと、パンフレットなどの資料が充実していて、レンジャーが解説するたくさんプログラムがあるのが普通だが、ここは本土から遠く離れお客はほとんど来ないので、自然観察プログラム等は皆無である。生物と考古学の専門家が1人ずつと、公園のメンテナンスをしていると思われる男性スタッフ3人と他に職員2人、他にもいるかもしれないが会ったのはそれだけだ。どこへ行ったら鳥やオオコウモリが観察できるか教えてもらったり、公園のパンフレットをもらったが、あいにくと考古学の専門家しかいなかったもので、あまり詳しい話は聞くことができなかった。

しかし、近くにある Department of marine and wildlife resources のワイルドライフ部門にはオオコウモリと鳥の研究者が1人ずついる。2人とも頻りにフィールド調査に出ている研究者なので、ねぐらはどこにあるか、観察しやすいポイントはどこか、何を食べているかなどをよく知っていて、情報を集めるにはこちらの方がいい。

屋間に悠然と滑翔するオオコウモリ

さてアメリカンサモアのオオコウモリの生息状況であるが、太平洋の中の火山島であるから、当然ながら在来の哺乳類はコウモリだけで、3種のオオコウモリが生息している。

小コウモリはサシオコウモリ *Emballonura raffrayana* (?) 1種だけ。Dpt. of marine and wildlife resources の女性研究者 RUTH さんによれば、ハリ



ケーンで生息地の洞窟が浸水して現在の生息状況は不明であるとのことだ。滞在中は毎晩空を眺めていたが、小コウモリは見かけなかったし、バットディテクターにも反応はなかった。明け方まだ暗いうちに、大木の上空でたくさん舞っているものが出て、一瞬どっきりしたが、コシジロアナツバメであった。

サモアオオコウモリ *Pteropus samoensis* は、サモア諸島とフィジー諸島だけに生息し、ワシントン条約の付属書 I 掲載種で IUCN のレッドリストでも絶滅危惧 II 類になっている種だが、ここツツリア島では結構姿が見られる。トンガオオコウモリ *Pteropus tonganus* (写真2) も付属書 I 掲載種だが、これはパプア・ニューギニアのカルカル島からサモア諸島、クック諸島まで南太平洋のかなり広範囲に生息していて、こういった国々の記念切手によく使われている。



写真2 夕暮れ時に飛ぶトンガオオコウモリ

アメリカンサモアではオオコウモリを食べる話は聞かなかったが、1980年代にはかなりの数がグアムに食用として輸出されており、だいぶ生息数が減ったそうである。つまり遠くマリアナのチャモロ人のお腹にはいってしまったわけだ。また島々を襲うハリケーンもオオコウモリに被害を与えるようだ。

同じ地域に2種のオオコウモリが生息しているのを見るのは初めてである。大きさは、RUTHさんのところで標本を並べた写真を見たところではトンガオオコウモリの方が若干大きいように見えたが、野外で区別できるほどの違いではない。日本のクビワオオコウモリやオガサワラオオコウモリと同じ位で翼を広げると1m近くになる。

サモアオオコウモリは昼行性である。群馬県立自然史博物館の展示でオオコウモリのことを昼間活動するコウモリと表現していたが、日本やマリアナで見ている限りでは、昼間森の周辺を飛ぶ姿を見ることがあっても、基本的には夜行性だと思う。しかしサモアオオコウモリは、白昼堂々と空高く飛ぶ。典型的なサモアオオコウモリは、体は褐色で、前頭部から頭頂が白く顔の毛も明るい、個体差が大きく全身褐色に見えるものもある。またこの頭の白は飛んでいるときには向きによってはわかりづらい。翼はトンガオオコウモリより幅広い。サモアオオコウモリは上昇気流にのって上空高く舞い上がったり、はるか彼方まで一気に滑空する。パンフレットやBCIの記事やビジターセンターで聞いたときにオオコウモリの飛び方として soaring という表現をつかっていたが、まるでガンカドリやカツオドリのように翼を広げて滑翔する。日本で見っていたときも、オオコウモリは小コウモリよりゆったりと飛ぶと思ったが、それでも通常は、はばたき飛翔をする。ところがサモアオオコウモリははばたく姿をあまり見ない。悠然としたこの滑翔は、一見に値する。

トンガオオコウモリは基本的に夜行性で、夕暮れにも夜遅くにも飛んでいる。サモアオオコウモリよりも細長い翼を持ち、褐色の体にくっきりとした幅広い黄色の首輪模様がある。ただし、この首輪模様は前面はないので、下から眺めているとよくわからない。

レインメーカー山の峠から

アメリカンサモアといえばサマセット・モームの短編「雨」である。来る日も来る日も土砂降りの雨が降る雨期のアメリカンサモアが舞台となっている。パゴパゴ湾の東側に、小説に何度も出てくる通称レインメーカー山がある。標高523mの、険しくそそり立った山で、われわれが行ったのは乾期だったが、それでもこの山に雲が懸かると、

やがて土砂降りのスコールがパゴパゴ湾沿いの集落にやって来る。まさに雨をつくる山である。この山の麓には、なかなかいい雨林が発達していて、自分の頭ほどの大きさの実をくわえたサモアオオコウモリやトンガオオコウモリが飛んでいるのを目にすることももある。種子散布者として働いている真っ最中というわけだ。

昼間この山の近くの峠へ行くと、サモアオオコウモリが円を描くように滑翔している姿が見られる。そして夕暮れ時になると、島の北側斜面をねぐらとしているトンガオオコウモリが、次々と峠を越えて南の方へ通過していく。トンガオオコウモリは集団でねぐらをつくるので（サモアオオコウモリは単独か小さなコロニー）一緒に寝ているオオコウモリが同時に飛び立つのか、通過には波があって、何頭もが連続して通ることがある。夕暮れ時にこの峠に立ち、夕陽やパゴパゴ湾の夜景を背景に次々と通過していくオオコウモリの姿を見ていると、それだけでアメリカンサモアにやって来てよかったなと思えてくる。

アメリカンサモアは、オオコウモリだけでなく、鳥の方もおもしろいのだが、こちらは、『バーダー』（2000年5月号）か次のURLでご覧いただきたい。

<http://homepage2.nifty.com/flyingfox/>

（おおさわ・けいて、おおさわ・ゆうし 埼玉県川越市）

コウモリの会総会報告

編集部

2000年7月9日、コウモリフェスタ2000 in 広島の会場の広島市安佐動物公園科学館ホールにて、第6回コウモリの会総会が開かれました。

1 開会の挨拶

・これまで会務執行の事後承認 ・総会議題案での議事進行の了承 ◎以上2点につきまして了承（承認）を頂きました。

2 事業報告（1999.7.16 - 2000.6.20）

会誌コウモリ通信 Vol.8No1 発行、コウモリフェスティバル in 美幌（1999.7.31-8.1 開催）の共催、ホームページを新設、缶バッジ作成、調査スタッフ登録。 ◎以上につきまして了承（承認）をいただきました。

3 会計報告（1999.7.16 - 2000.6.20）

●コウモリフェスティバル（1999in 美幌）総売上 168,663 円うち、会独自の売上と各出典者からの寄付の計 69,975 円

●会の会計報告

歳入計 604,014 円（内訳：前年度繰越金 209,015 円、会費及び寄付、ポストカード、缶バッジ等の売上金 325,024 円、1999 コウモリフェスティバル売上金 69,975 円）

歳出計 323,505 円（内訳：郵送料（切手、ハガキ等）116,588 円、文具（ラベル、封筒など）代 7,665 円、缶バッジ作成代 35,940 円、会誌、コウモリ F チラシ印刷代 163,312 円）

本年度繰越金 280,509 円 ◎以上につきまして了承（承認）を頂きました。

4 事業案

(1) 来年のコウモリフェス開催

◎山梨県の中川雄三氏と岐阜県の山本輝正氏の協議でどちらかでの開催目指すことになりました。2000年11月現在、2001年は岐阜県のサンパークランドでコウモリフェスを行うことで進行しています。詳細は本誌2ページをご覧ください。

(2) 会誌 ◎今年度は2回発行予定です。

(3) 観察会後援について …コウモリの会版「コウモリ観察会実施ガイドライン」を作成し、会員が開催する観察会に対して、これに従って行われるものについては、「コウモリの会の後援」の名前の使用をしていただこうというものです。人集めに

役立ち、レベルアップにもなるかとの考えからです。◎事業案に「実施報告」の項目を追加することで承認されました。(ガイドラインの内容につきましては別項1をご参照ください)

(4) Learning about Bats シリーズ発行 ◎今後も発行を進めることになりました。

(5) コウモリ関係の問い合わせ等への対応体制について・・・評議員を、得意な分野を元にそれぞれ担当と各地区担当の2つを受け持ってもらい運営をする(一般会員で意思のある人には協力をお願いします。)◎山本会長が担当となり、分担などを進めることになりました。

(6) 「コウモリの会」創設10周年記念誌の準備 1993年創設ですので、2002年には発行できるように、内容及び執筆者の決定と依頼の準備発行のための特別会計の創設と集金方法について意見を集めました。

◎発行を進めることを認められましたので、山本会長が中心となり、現在、進行しています。内容等ご意見のある方は連絡を下さい。

(7) オヒキコウモリ保護について◎「2000年コウモリフェスタ宣言」という形に体裁を変えて発表することで承認を得ました。(内容は本誌2ページをご参照ください)

(8) MLについて◎今後も奈良の井上龍一先生にお願いして、評議員間のMLの管理をお願いすることになりました。*これに関しましては、総会后、井上先生にご了解をいただきました。また、会員のMLであるBSCJに関しても管理をお願いすることになり、ご了解いただきました。

5 予算案

●歳入 前年度繰越金 280,509円、会費および寄付、グッズ等売上金 300,000円、2000コウモリフェスタ売上金 57,292円

合計 637,801円

●歳出 郵送料(会報2回、ポスター・チラシ、総会案内) 180,000円、文具等(ラベル、封筒、コピー用紙代等) 25,000円、会誌印刷(2回) 200,000円、コウモリフェスタ開催費用(ポスター・チラシ印刷代、通信費) 150,000円、予備費 82,801円 合計 637,801円

歳入の会費(会員数「320名」×1,000円)より少なくなっているのは、昨年度複数年支払った人が多かったためです。繰越金が多いのは昨年度会誌を1回しか出さなかったため、今後は年2回の発行を予定しています。予備費が出ますが、会費収入がかなり流動的であること、会費を払ってもらうのが、毎年会報を郵送してから(3~4月)なので、会報制作時には予算(持ちがね)が0になる可能性が高いので、できるだけ余裕が必要と思われるためです。つまり、今年度は28万で会誌を作成してから、会費が納入されるという、支出と収入の順番になってしまっているわけです。

(1) コウモリ保護基金創設(コウモリフェス用・各種問題対応用)の提案

振込用紙をいれてお願いします形、募金箱等の設置、会誌等への広告掲載により収入◎以上について承認されました(詳細は本誌インフォメーションをご参照ください)。

6 会則改正案(別項2をご参照ください)

◎承認いただきました。なお、まだ会則に不備があるので、来年度の総会に向けてさらに検討をすることと成りました。

7 この後の議長選出 ◎林 聡彦さんに議長をお願いいたしました。

8 役員総辞職 ◎承認いただきました。

9 役員改選(議長)

◎これまでの経過より、後1年山本輝正氏に引き続いて会長をお願いすることになりました。

新役員は以下の通りです。 会長 山本輝正 副会長 松村澄子 事務局長 水野昌彦 編集委員長 三笠暁子
評議員(五十音順) 赤沢 泰・大沢夕志・大沢啓子・佐野 明・中川雄三・橋本 肇・原田正史・船越公威・丸山健一郎・向山 満・安井さち子

10 新会長挨拶

評議員の方々をはじめみなさんの協力を得ないととてもやっていけませんので、皆様方のご協力をお願いいたします。ご意見等がある方はどんどん言って下さい。

11 閉会の挨拶



【別項1】 コウモリの会版「コウモリ観察会実施ガイドライン」(平成12年7月9日制定)

1 目的

コウモリは、長い間多くの方々に誤解と偏見により良くない生き物と思われてきました。しかし、いろいろな方々の努力で少しずつではありますが、本当の姿への理解が進んでいることも事実です。私たちコウモリの会でも、多くの方々にコウモリの本当の姿を知ってもらおうと、コウモリフェスティバル等の催しを行ってきました。そして、その際に実物を見てもらうことの重要性等から、必ずコウモリ観察会も実施してきました。コウモリ理解のためのこのような試みは、少しずつではあるけれども確実に成果をあげようものと確信しています。

しかし、1年に1回しか開かれないコウモリの会が中心になって行う観察会ではその効果は、スローすぎることも事実です。一方、現在各地でコウモリの観察会が開かれるようになっていきます。そこでコウモリの会会員が各地で行うコウモリ観察会に「コウモリの会後援」と銘打って行えるようにして、人を集めやすくするなどの効果から、少しでもコウモリへの理解者を増やせるようには出来ないかと考えました。

そこで、コウモリの会として後援してもいい観察会の条件(以下ガイドライン)を作成し、それに従って行われるものについては、「コウモリの会後援」の名前の使用をして頂こうと思います。

2 ガイドライン

① 事前準備

(A) 保険への加入

たとえ参加費は取らないのであっても、必ず保険へは加入できるよう保険料の徴収を行うなど(または主催者の負担等)して万が一の場合に備える。

(B) 所有者への事前説明

観察会を行う場所が、他人の所用物であったりまたはその近くである場合は、事前に観察会を行う旨を説明し解を取っておくなど工夫した配慮をする。また、その場所を研究対象地に行っている人がある場合は、了解を得て行うこと。事後承認や見切り発車で決して実施しない。(その場所の研究者の了解が得られない場合は、観察会は決して実施しないこと)

(C) 危険性の予知

観察会場所の事前調査等を行い、危険な場所(溝や崖・階段)での事故や交通事故等の問題の起きない予防措置などの工夫をする。

② 観察会の前に

(A) レクチャーを行う。

実際の観察の前には必ず、コウモリとその観察会についてのレクチャーを行い、コウモリ一般の説明をして誤解や偏見を解く努力をする。また、バットディテクターを使った観察のおもしろさについても説明し、実際に姿が見えなくともコウモリの活動が分かるおもしろさについても説明するとよい。

(B) 観察のマナーについての説明

観察会を行う場所が、他人の所用物であったりまたはその近くである事が多いので他人の所有地であることに配慮した工夫をする。

(C) 危険な場所や交通事故等への配慮を説明する。

(D) 保険には必ず加入してもらうよう、受付等で人数(氏名)等の把握をする。

(E) 野生の姿を見せてもらうのだから、出来る限りこちら側の影響を少なくする工夫をして観察する旨を説明する。(例:大声や奇声等をあげたりしない。周りの自然物等を見やすくするためなどの目的で改変しない。直接ライトを当てない。等々)

③ 野外での観察会

(A) 洞窟や樹洞近くでの出洞・帰洞等の観察の場合

1. コウモリの出入りする場所に、近づきすぎない。最低でも10mは離れて観察をする。
2. 観察の際には直接ライトを当てず、赤いフィルターをつけたライトや赤外線カメラなどを用いるなど工夫をする
3. 大きな声を上げたり、騒音等を出して脅かさない。

(B): nightroost や電灯付近等での観察会の場合

1. (A) の1~3と同様

(C): 川岸や草原等での観察会の場合

1. 観察の際には直接ライトを当てず、赤いフィルターをつけたライトや赤外線カメラなどを用いるなど工夫をする
2. 大きな声を上げたり、騒音等を出して脅かさない。

④ 洞窟・トンネル等内部での観察会

これについては現時点では、以下(A~C)の理由から「コウモリの会後援」の使用は認められません。

(A) 重大事故発生時の責任

万が一の場合の事故(落盤・墜落等)での、人的・社会的被害が大きすぎると考えられるため。いずれの場合でもコウモリの会として責任をとりかねるため。

(B) コウモリよりの感染症の危険とそれに対する社会的反応の大きさを考慮して

海外では、コウモリの生息する洞窟に入るなどによる病気の感染が報告されています。幸い現在まで日本ではそのような報告はありません。しかし、近年多くの外国の野生生物が輸入されていることから、それらとともにコウモリの生息環境を好む病原菌等が国内に侵入するとも限りません。万が一このような形でコウモリよりの感染が報告されれば、現在の日本の状況では、コウモリが大事な人間が大事な議論になってしまい、コウモリ保護の活動に冷や水をかける事態になりかねないため。

(C) ディスタープの甚大さ

洞窟は基本的にコウモリの隠れ家であることから、侵入者に対しては最悪の場合隠れ家放棄となりかねないため。これではコウモリ保護のためにやっていることが、その逆の行為となってしまうため。観察会では、あえて隠れ家に入らなくとも、コウモリへの理解を進めることは可能と考えるため。

また、出産期や冬眠期のコウモリへのディスタープは、そこのコウモリ自体の生存を脅かす恐れがあるため。

3 「コウモリの会後援」の取り方

(A) 手続き

以上2の「1」~「4」のことに従ってコウモリの会会員が行おうとする観察会については、以下の「様式1」で事務局または担当評議員に申請して下さい。申請があった場合、事務局または担当評議員は会長に連絡し、評議員会の開催を要請する。評議員会(MLなどで代用することもあり)で検討した後、会長が申請者に結果を遅くとも1ヶ月前までに連絡するものとします。

(B) 申請は、少なくとも実施の2ヶ月前までにする事を原則とします。

(C) 後援申請及びその使用について、一切の料金の徴収はしません。また、後援に際し、現時点では助成は行えません(補助金等がとれた場合については、その内容について(機材等の貸し出しなど)今後検討します。)

- (D) 観察会実施に際しての諸々の問題に対する責任は実施母体にあり、コウモリの会は一切責任を負いません。
 (E) 観察会実施後は、速やかにその報告書（特に様式は定めません）をコウモリの会事務局を提出してください。

「様式」（郵送でも e-mail でも申請可能）

「コウモリの会」後援申請書

申請年月日

コウモリの会会長殿

実施団体名

実施代表者名と連絡先（住所：電話・FAX番号：あれば e-mail） 勤務先（住所：電話・FAX番号：あれば e-mail）

コウモリの会版「コウモリ観察会実施ガイドライン」に従って、以下のようにコウモリ観察会を実施しますので、「コウモリの会後援」の使用許可を申請します。

1 主催： 2 共催：（あれば） 3 後援：（あれば） 4 実施年月日時間（時間帯）（複数回ある場合は、まとめて同じ申請書に記入する）

5 実施場所 6 保険の概要： 7 募集対象者とその人数 8 観察対象コウモリ種名 9 実施の概要 10 その他

11 案内チラシ等がある場合は添付して下さい。

4 適用範囲

本ガイドラインは、「コウモリの会後援」を必要とする観察会についてのみ適用される。なお、当然ですが本ガイドラインは、「コウモリの会後援」を必要としないで行われる観察会の内容や実施の規制をしようとするものではありません。同様に、研究者が行う研究や研究者育成のためのセミナー等についてもその内容や実施について規制しようとするものではありません。

5 参考

・観察会の際に加入できる保険の例

「参加者に対する保険」

・レクリエーション保険としていろいろな保険会社が、プランを持っているようです。ある会社では一人1回100円で死亡約3000万円、入院1日1万円程度（180日間まで）のようです。

「実施者に対する保険」

ボランティア活動保険（パンフレットと問い合わせた回答より）

・一人年間300円の掛け金で、傷害部分（ボランティア自身のケガ）最高1115.3万円と賠償責任部分（活動中他人の身体・財物に損害を与えた場合）最高3億5000万円がセットで保証される。

・開催地の市町村・都道府県の社会福祉協議会に連絡をして認められれば、保険には入れるそうです。（野鳥観察会など非営利活動ならばまず認められるだろうとの事です。）

実は、「コウモリ観察会」と称して行われているものの中に、研究者のフィールドと知りながら一般の人を洞窟に入れている例や、コウモリの捕獲には環境庁または県の許可があるにもかかわらず捕獲許可なしで捕獲して見せている例、などが報告されています。このような（1）違法行為、（2）コウモリ自身への悪影響、（3）観察者自身への危険性、（4）保護研究活動への妨害をなくすためにもこのような例を他にもご存知の方はお知らせください。

コウモリの会 会長 山本輝正

【別項2】 コウモリの会会則改正案

目的

- (1) 会長の不在の事態への対応のために副会長を設け、代理として会務を行えるようにする。
 (2) 誰が会長に成って頂いても、コウモリの会に大きな影響が出ない（会長一人が苦勞しない）体制を作るために、評議員の人数制限をなくす（評議員間で仕事の分担をする）。
 (3) 以上のために関係する会則の部分の変更。
 以上が会則改正の目的です。

「コウモリの会」会則改正案

[旧] コウモリの会会則（1995年10月1日施行）

[新] コウモリの会会則（1995年10月1日施行、2000年7月9日改正）

[旧] 第9条 「種別」 本会に次の役員をおく。会長1名、事務局長1名、編集委員長1名、他の評議員7名の合計10名。

[新] 第9条 「種別」 本会に次の役員をおく。会長1名、副会長1名、事務局長1名、編集委員長1名、他の評議員5名

[追加]

第13条 「副会長」 副会長は、会長を補佐し、会長が不在の場合はその代理を務める。（以後、第〇条を順次下げていく）

[旧] 第14条 「評議員会」 評議員会は会長、事務局長、編集委員長、評議員で構成し、会長が議長となる。評議員会は必要に応じて会長が召集し、会の運営方針等を審議執行する。

[新] 第15条 「評議員会」 評議員会は会長、副会長、事務局長、編集委員長、評議員で構成し、会長が議長となる。評議員会は必要に応じて会長が召集し、会の運営方針等を審議執行する。

[旧] 付則

第1条 本会則は1995年10月1日より施行する。

[新] 付則

第1条 本会則は、2000年7月9日より施行する。

*コウモリの会会則の全文は会報 Vol.3, No.2, 1995.12 に掲載されています。お持ちでなく、会則をご覧になりたい方は、事務局までご連絡ください。

■2001年のコウモリフェスティバルは岐阜で行います！

来年(2001年)のコウモリフェスティバルは岐阜県で行うことに決まりました。詳しくは、本誌2ページをご覧ください。

■コウモリ観察会実施ガイドラインができました

コウモリへのディスターブ(妨害)を考慮し、しかも安全にコウモリの観察会を行うためのガイドラインを会で作成しました(内容は本誌14ページをご覧ください)。また、このガイドラインに沿って行われる観察会についてコウモリの会で後援をしようということで申請書の書き方等も添付してあります。ぜひご活用下さい。

■コウモリ保護基金を設立しました

コウモリの会では、これまで様々なファンドをもらったり、その時の地域の自治体などの資金的応援でコウモリフェスタを行ってきました。今後、コウモリフェスタを会独自でも行えるための基金や、コウモリに関する問題がおこった場合の対応にかかる資金を会員の方々の募金で作りたいと思います。募金方法は会費とともに振込用紙で願ひする形、募金箱等の設置、会誌等への広告掲載による収入などを考えております。会計報告は次年度の総会で行います。なお、募金は一口いくらでもかまいません。会員の皆様には来年の春号の際に会費お振込願ひとともに募金願ひのチラシを同封させていただく予定です。どうぞよろしく願ひいたします。

■コウモリの会事務局ヘルパー募集！

今後さらに会誌の充実をはかるため、年2回発行なら6カ月ごとの「論文リスト集(主に日本の雑誌のもの)」や「論文以外の資料集(本、雑誌、新聞記事等)」、「コウモリグッズ紹介」、「コウモリ関係イベント報告」等を掲載してはどうかと考えています。それに伴い編集作業や会報の発送等をお手伝いいただける方を募集します。発送作業は事務局(逗子)にいらっしゃる範囲にお住まいの方(回数は年2回ほど)、編集作業はコンピュータでテキスト入力ができemailが使える方(A)、スキャナ、photoshop搭載のMachintoshがあり画像入力が可能な方(B)です。お手伝いして下さる方がいらっしゃいましたらぜひ事務局までご希望の業種をemail:mizunobat@syd.odn.ne.jp・ハガキ・FAXにてご連絡ください。

■コウモリ通信編集委員について検討が進められています

コウモリ通信は現在のように論文や論文ではないけれど資料としては重要なものを掲載していく方向で進めていこうと考えておりますが、資料としての価値を出すために少なくとも「いつ、どこで、誰が、何を、どうしたなど」のチェックをして掲載しなければならないと考えています(当然、生息場所等については詳しく載せられないということはありません)。そのために多少の変更(修正など)を願ひすることが生じるかもしれません。よろしくご了承を願ひしたいと思います。また、チェックする編集委員や書き方の書式を決めるかについて、現在検討中しています。

■西表島のエコツアーによる繁殖群攪乱問題について

西表島で1983年からカグラコウモリの生態を研究している山口大学の松村澄子氏から、出産に近い母獣の数と行動に異変が起こり、島内のある観光業者が3月頃から調査洞窟(人の背丈ほどの狭い壕)にライトを持ってコウモリを見せるエコツアーを集中的に始めたことの影響らしいとの報告を受けました。業者に、繁殖期なので当面の入洞自粛を依頼したが、以後1カ月間に洞窟入口まで到来した観光客数は約200名に達したとのことです。

カグラコウモリはレッドデータブックの絶滅危惧種にランクされている日本の固有種で、八重山諸島にのみ生息しています。会としてもただちに評議員間で対策を協議しました。洞窟は国有林内にあるので沖縄県森林管理署署長宛てに入洞自粛の願ひ看板を設置してくれるよう要請しました

が、できないとの回答が松村氏に届けられました。環境庁野生物種課、西表国立公園管理事務所などにも陳情したが、同様の回答とのことです。最終的には、地元公民館長名で自粛の願ひ看板を立てたとのことです。

来年の春には、どのような事態になるか、会としても見守ってゆかなくてはなりません。

■彩流社に抗議文を送りました

「オフサイドブックス13都市動物奮闘記」(佐々木洋監修、東京アニマルズ研究会編、彩流社、2000)p89に「コウモリをじっくり観察したいのなら、大きめの虫取り用のアミで彼らを取ってみよう。…捕まえやすいかも。…ただし保護されている動物なので、観察した後は必ず逃がすこと。」という文章があり、鳥獣保護法に反する違法行為を助長しかねない記載であることから、評議員で検討した結果、彩流社に訂正文の添付または増刷時の訂正を要望する抗議文を11月7日に郵送しました。

■前号コウモリ通信の記事に訂正があります

前号のコウモリ通信Vol.8No.1のP18に掲載した「富士山5合目で発見したコウモリ」中のガの種名の訂正について執筆者の浦野さんから連絡がありました。ガはアオシタバではなく、フクラスズメだということです。

■洋書案内

会員で奈良県在住の沢田勇さんよりコウモリに関する本の紹介をいただきました。「I parassiti dei pipistrelli (Mammalia, Chiroptera) della fauna italiana」(Benedetto Lanza, 1999, Museo Regionale di Scienze Naturali Torino)。コウモリの内部寄生虫に関する専門書は非常に少なく、本書はイタリアのみならず、世界各地産のコウモリの内部寄生虫の解説もあり、引用文献の数も多いことから、コウモリの内部寄生虫の研究を志す方にはたいへん参考になるとのことです。購入は丸善など洋書を扱う書店にて注文すれば入手可能だと思います。

■BSCJ参加募集とメールアドレス変更の場合の手続きについて

コウモリの会メーリングリストBSCJは、会員の方ならどなたでも参加できます。会誌や総会だけでは、なかなか会員の方々の意見を反映できません。少しでも意見等を聞くように(聞く体制を持ちながら)会を進めたいと思っていますので、その点をご理解を頂き、ぜひ多くの会員にBSCJへご加入していただきますよう願ひいたします。参加方法bat-request@nara-edu.ac.jp宛に、subscribeとだけ書いたメールを送ります(HTMLではなく、テキスト形式で送って下さい)。自動的に登録されます。なお、退会の時は同様にしてunsubscribeです。登録をしたらbat@nara-edu.ac.jp宛に自己紹介を書いて送って下さい。また登録後ご自分のメールアドレスを変更する場合は、変わる前に必ず一度退会の手続きをとるよう願ひいたします。

■会に文献を寄贈していただいた方々、本当にどうもありがとうございます。今後、いただいた文献をリスト化しコウモリ通信に掲載するとともに、会のホームページの文献紹介に順次掲載させていただく予定です。

■コウモリの会では、コウモリに関する情報を随時受け付けておりますので、お気軽に事務局にお寄せ下さい。また、原稿を下された方にはささやかながら会費1年分を無料にさせていただきます。

■入会案内

ハガキ・FAX・Email ()にて事務局までご連絡ください。入会の案内を郵送いたします。*年会費は1000円です。振込先は郵便振替口座00270-4-12189口座名:コウモリの会。

コウモリ通信 Vol.8 No.2 2000.12 (通巻第13号)

- シンボルマーク 村上康成
- 編集 山本輝正・三笠暁子・三笠恵子
水野昌彦
- 発行 コウモリの会

[編集後記]今回はヒナコウモリについての記事が集まりました。夏の出産コロニーについては青森の天間館神社など各地で見つかったのはいるものの、冬眠の場所についてはあまり知られていないようです。少しずつですが、日本の各種のコウモリの生活がわかってくると、その保護についてもいろいろとアイデアが出てくることと思います。コウモリは種が多く、たいへんですが、その魅力的な動物です。(三)